

令和5年度(前期日程)

入学者選抜学力検査問題

# 国語

(国語総合・現代文B・古典B)

試験時間 120分

文学部, 教育学部, 法学部, 医学部(保健学科看護学専攻)

問題	ページ
㊦～㊨	1～11

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで, この冊子を開いてはいけません。
  2. 各解答紙の2箇所受験番号を必ず記入しなさい。  
なお, 解答紙には, 必要事項以外は記入してはいけません。
  3. 解答は, 必ず解答紙の指定された場所に記入しなさい。
  4. 試験開始後, この冊子又は解答紙に落丁・乱丁及び印刷の不鮮明な箇所などがあれば, 手を挙げて監督者に知らせなさい。
  5. この冊子の白紙と余白部分は, 適宜下書きに使用してもかまいません。
  6. この冊子をとめている針金は, 解答時に取りはずしてもかまいません。
  7. 試験終了後, 解答紙は持ち帰ってはいけません。
  8. 試験終了後, この冊子は持ち帰りなさい。
- ※この冊子の中に解答紙が挟み込んであります。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

日本国内の大学でかつて広く使われていた文化人類学の教科書の中で、人間の時間の経験に照らして、通過儀礼および人生儀礼についての説明がなされていた。本来は形もないカオスの状態、あるいは区切れのない連続体に対して人間は区切れを入れる。そのことによって、人為的に時間の体系をつくり出したのである。その後、そうやってつくり上げた時間の体系を通じて、人間は時を経験するようになったとされる。

ところが、私たちは、私たち人間が時間の体系をつくり出したことを、今やきれいさっぱり忘れてしまっている。私たち現代人にとって、時間はつくられたものではない。時間ほど確かなものはない。それは、私たちの外部に<sup>⑦</sup>ゲンゼンと存在するものと感じられるほどである。時間によつて働くことが管理され、給与は時間単位で決められる。学校では、授業の開始と終了時間が決められていて、試験ともなれば、開始後二十分を過ぎると、試験そのものを受けることができなくなったりする。

時間を体系化することは、はたして、人間が生まれながらに持っていた特性だったのだろうか。時計が発明されたのは、今から四千年ほど前のシュメールにおいてであるとされる。時計の発明は、時間の体系化の後のはずだ。そうだとすれば、人類の歴史のどこかで、時間が体系化されたはずである。いわば時間には誕生の瞬間があったのだ。では、私たちの祖先は、いったいいつ頃から、カオスに区切れ目を入れ、時間を体系化するようになったのだろうか。

※ プナンとしばらく一緒に暮らしていると、私たちとは異なる時間が流れていたり、時間に対する感覚が違っていたりする「異文化の時間経験」よりも、より根源的な意味で、そこには時間の観念がない、あるいは時間の観念が薄いと感じられるようになる。プナンなら、人の住む場所から離れた無人の地にたどり着いて、一人ぼっちで生きなければならなくなっても、映画『キャスト・アウェイ』（二〇〇〇年アメリカ）で、トム・ハンクス扮する無人島に一人漂着した主人公のように、太陽が昇って沈むまでをひとつの単位として、木のミキヤ岩などに印をつけて、最初に漂着してからどれくらい経ったのかを計るというようなことはしないであろうと思われる。

プナンに生年月日を探ねると、、答えられる人は誰一人としていない。自分がいつ生まれたのかを覚えてもいないし、周りの者も誰も知らないのである。考えてみれば、西暦や年号および月日を用いて生まれた日を特定するという、誕生をめぐる日本および先進諸国の習慣に基づいて、プナンに生まれた日を探ね、それに対する答を期待する私自身による問いの設定のほうが問題なのであろう。年月日によって生まれを言い表すことは、人類の普遍的な表現の様式ではないのだ。そうだとすれば、プナンは、自分の生まれた日付を覚えていないというよりも、これまで、そういったことを認識したり表現したりする術を持たなかったし、言い表す必要もなかったのだと考えるべきだろう。

プナンは、誰某は自分よりも先に生まれた、誰某が自分よりも少し後に生まれたというふう

に、年齢については、時間軸という絶対的な基準を用いて言い表すことはない。そこには、あや

ふやな、相対的な差異があるだけである。

補足して述べれば、絶対的な基準であとさを決めるのではない相対的な年齢意識は、プナンが、生まれた日付のあとさき、年齢の大小に基づく序列によって社会を組織していないことにもつながるように思われる。ここでは、一般に、生まれのあとさが何かをする際の基準にはなりえない。そのことは、人間はみな原理的には対等であるという、プナン社会の平等主義のアイデアに関わっている。

プナンは、時系列の観念が薄い。せいぜい雨が多く降ったり、少なかったりといった程度の気候変化しかない、季節性のない熱帯雨林の中で、かつて彼らはサゴヤシや野生動物を採集・狩猟しながら暮らしていた。食糧がなくなると、別の場所へと移動した。今日、ブラガ川上流域に暮らすプナンは、一九八〇年代初頭までは、そうしたノマディック（遊動的）な暮らしをしていた。

ノマドだったころのプナンにとって、時系列に沿って考えたり、時間や暦で生活のリズムを管理したりする必要はなかったと推測される。時間の観念や暦がないことは、熱帯の森の中で生活する上で、何ら支障にも障害にもならなかったのだろう。いや、必要がなかったから、時間の観念や暦がなかったのだと言える。今日に至るまで、プナン社会にカレンダーの類はない。

ここで、時間の体系化に関して、ひとつの仮説が立てられる。人類社会に時間の観念がはつきりと出現してくるのは、今から一万年ほど前まで続く採集狩猟の段階ではなく、人類が農耕や牧畜という生業を始めてからのことではないかというものである。将来に向けて生きていく糧を備蓄するために、いつ頃、どのような作業に取りかからなければならぬのかを決める上で、暦やカレンダーが必要になった。

私が一九九〇年代に現地調査した、ボルネオ島（インドネシア・西カリマンタン州）の焼畑稲作民カリスの社会には、夜の空高くに見える三ツ星を見上げた時に、被<sup>かぶ</sup>っている帽子が後ろに滑り落ちるようになったら種蒔<sup>ま</sup>きをしなければならぬという、その社会独自の農耕カレンダーがあった。自然現象が農耕作業の開始を告げ、そうしたことをひとつの区切りとするようになり、そのような手がかりを実用的なレベルで人々が用いるようになって、その後しだいに、暦が必要とされるようになるとともに、時間の体系化が進められていったのではないだろうか。

⑨ ヒルガエって、農耕が開始される以前の、採集狩猟を主な生業とする社会では、そういった類の時間の管理、時系列の組織化は要らなかつたのではないか。現在でも、プナンは、何かに対して備えるということをほとんどしない。あれをするためにこうしておかなければならないというような機序が、個人のレベルでは少しだけあるが、共同体や社会のレベルではほとんどない。ノマドであった時代にも、彼らは何かに備えるということをしなかつたはずである。今日のプナンは、そのことを受け継いでいる。

プナンは、食料や財が豊かに周りにある時には<sup>⑩</sup>ドンヨクに消費し、それらがなくなれば、別の場所に移って探す。森のどこかには、野生動物や果実などの食料をはじめ、人々が必要とする様々な財が存在する。だから彼らは特定の場所で備えたり待ったりすることはなく、ただ移動す

るだけである。そうした環境で暮らす人々にとっては、すでに述べたように、暦や時間は必ずしも必要ではなかったのだろう。

今日、プナン語に「時」や「時間」にあたる言葉がないわけではない。「過去 (*jaha saun*)」や「現在 (*jaha ien*)」というような言い方がある。しかし、それはバク<sup>④</sup>たるものとしての過去であり、現在であり、それらの語彙は、私たちが用いているような、時刻や日付で表現される絶対的な基準による時間の観念を土台として組み立てられているものではない。

(奥野克巳『ありがともごめんなさいもいらぬ森の民と暮らして人類学者が考えたこと』

による)

(注) プナン……熱帯のボルネオ島に暮らす、狩猟採集民あるいは元・狩猟採集民。人類学者で

ある筆者はプナンの居住地を訪問し、その生活を調査した。

問一 傍線部⑦から⑩の片仮名を漢字に直せ。

問二 空欄に入る「年齢や性別の区別なく、あらゆる人」を表す四字の熟語を答えよ。

問三 二重傍線部の理由について、筆者が挙げている要因を過不足なく示しながら、わかりやすく説明せよ。

問四 人類が時を経験するようになった過程に関する筆者の考えについて、本文全体を踏まえてわかりやすく説明せよ。

次の文章は、ある小説の一部である。東海道三島の宿にある鹿間屋の次男、次郎兵衛は喧嘩の修行を思い立つ。読んで、後の問に答えよ。

次郎兵衛は武器を持つことをきらった。武器の力で勝ったとてそれは男でない。素手の力で勝たないことには、おのれの心がすつきりしない。まずこぶしの作りかたから研究した。親指をこぶしの外へ出して置くと親指をくじかれるおそれがある。次郎兵衛はいろいろと研究したあげく、こぶしの中に親指をかくしてほかの四本の指の第一関節の背をきつちりすきまなく並べてみた。ひどく頑丈そうなこぶしができあがった。このきつちり並んだ第一関節の背で自分の膝頭をとんとついてみると、こぶしは少しも痛くなくてそのかわりに膝頭のほうがあつと飛びあがるほど痛かった。これは発見であった。次郎兵衛はつぎにその第一関節の背の皮を厚く固くすること計画した。朝、眼をさますとすぐに彼の新案のこぶしでもって枕元の煙草盆をひとつ殴った。まちを歩きながら、みちみちの土塀や板塀を殴った。居酒屋の卓を殴った。家の炬縁を殴った。

この修行に一年を費やした。煙草盆がばらばらにこわれ土塀や板塀に無数の大小の穴があき、居酒屋の卓に鱗ができ、家の炬縁がハイカラなくらいでこぼこになったころ、次郎兵衛はやつとおのれのこぶしの固さに自信を得た。この修行のあいだに次郎兵衛は殴りかたにもこつのあることを発見した。すなわち腕を、横から大廻しに廻して殴るよりは腋下からピストンのようにまっすぐに突きだして殴ったほうが約三倍の効果があるということであった。まっすぐに突きだす途中で腕を内側に半廻転ほどひねったなら更に四倍くらいの効力があるということをも知った。腕が螺旋のように相手の肉体へきりきり食いいるというわけであった。

つぎの一年は家の裏手にあたる国分寺跡の松林の中で修行をした。人の形をした五尺四五寸の高さの枯れた根株を殴るのであった。次郎兵衛はおのれのからだをすみからすみまで殴つてみて、眉間と水落ちが一番いたいという事実を知らされた。尚、むかしから言い伝えられている男の急所をも一応は考えてみたけれども、これはやはり下品な気がして、傲慢な男の覗うところではないと思つた。むこうずねもまた相当に痛いことを知つたが、これは足で蹴るのに都合のよいところであつて、次郎兵衛は喧嘩に足を使うことは卑怯でもありうしろめたくもあると思ひ、もつぱら眉間と水落ちを覗うことにきめたのである。枯れた根株の、眉間と水落ちに相当する高さの個処へ小刀で三角の印をつけ、毎日毎日、ばかりばかりと殴りつけた。おまえ、間違つてはいませんか。冗談じゃないかしら。おまえのその鼻の先が紫いろに腫れあがるとおかしく見えますよ。なおすのに百日もかかる。なんだか間違つていと思ひます。とたんにばかりと眉間を殴る。左手は水落ちを。

一年の修行ののち、枯木の三角の印は腕くらの深さに丸くくぼんだ。次郎兵衛は考えた。いまは百発百中である。けれどもまだまだ安心はできない。相手はこの根株のようにいつもだまつて立ちつくしてはいない。動いているのだ。次郎兵衛は三島のまちのほとんどこの曲りかどにでもある水車へ眼をつけた。富士の麓の雪が溶けて数十条の水量のたつぷりな澄んだ小川となり、三島の家々の土台下や縁先や庭の中をとって流れていて苔の生えた水車がそのたくさんの

小川の要処要処でゆっくりゆっくり廻まわっていた。次郎兵衛は夜、酒を呑のんでのかえりみち必ずひとつの水車を征伐した。廻りめぐっている水車の十六枚の板の舌を、順々にぽかりぽかりと殴るのである。はじめは見当がむずかしくてなかなかうまく行かなかったのであるが、しだいに三島のまちで破れた舌をだらりとさげたまま休んでいる水車を見かけることが多くなつた。

次郎兵衛はしばしば小川で水を浴びた。底ふかくもぐつてじっとしていることもあつた。喧嘩さいちゅうに誤つて足をすべらし小川へ転落した場合のことを考慮したのであつた。小川がまちじゅうを流れているのだから、あるいはそんな場合もあるであろう。さらし木綿の腹帯を更にぎゅつと強く巻きしめた。酒を多く腹へいれさせまいという用心からであつた。酔いどれたならば足がふらつき思わぬ不覚をとることもあろう。三年経たつた。大社のお祭りが三度来て、三度すぎた。修行がおわつた。次郎兵衛の風貌はいよいよどっしりとして **A** になつた。首を左か右へねじむけてしまふのにさえ一分間かかつた。

肉親は血のつながりのおかげで敏感である。父親の逸平は、次郎兵衛の修行を見抜いた。何を修行したかは知らなかつたけれど、何かしら大物になつたらしいということにだけは感づいた。逸平はまえからのたくらみを実行した。次郎兵衛に火消し頭の名譽職を受けつがせたのである。次郎兵衛はそのなんだか訳のわからぬ重々しげなものごしによつて多くの火消したちの信賴を得た。かしら、かしらとうやまわれるばかりで喧嘩の機会はととなかつた。ひよつとしたらもうこれは生涯、喧嘩をせずにこのまま死んで行くのかも知れないと若いかしらは味気ない思いをしていた。ねりにねりあげた両腕は夜ごとにもずかゆくなり、 **B** 気持ちでぼりぼりひっ搔かいた。力のやり場に困つて身もだえの果、とうとうやけくそな悪戯いたづら心を起し背中いっぱい刺青をした。直径五寸ほどの真紅の薔薇の花を、鯖さばに似た細長い五匹の魚が尖とがつたくちばしで四方からつついている模様であつた。背中から胸にかけて青い小波さざなみがいちめんうごいていた。この刺青のために次郎兵衛はいよいよ東海道にかくれなき男となり、火消したちは勿論もちろん、宿場のならずものにさえうやまわれ、もうはや喧嘩の望みは絶えてしまった。次郎兵衛は、これはやりきれないと思つた。

けれども機会は思いがけなくやつて来た。そのころ三島の宿に、鹿間屋と肩を並べてともに酒つくりを競つていた陣州屋丈六という金持ちがいた。この酒はいくぶん舌つたるく、色あいが濃厚であつた。丈六もまた酒によく似て、四人の妾めかけを持つているのにそれでも不足で五人目の妾を持つとうとして様様の工夫をしていた。鷹たかの白羽の矢が次郎兵衛の家の屋根を素通りしてそのおむかひの習字のお師匠の詫住わひすまいしている家の屋根のべんぺん草をかきわけてぐさつきささつたのである。お師匠はかるがるとは返事をしなかつた。二度、切腹をしかけては家人に見つけられて失敗したほどであつた。①次郎兵衛はその噂うわさを聞いて腕の鳴るのを覚えた。機会を狙つたのである。

三月みつき目に機会がやつて来た。十二月のはじめ、三島に珍らしい大雪が降つた。日の暮れかたからちらちらしはじめ間もなくおおい牡丹雪ぼたんゆきにかわり三寸くらい積つたころ、宿場の六個はなの半鐘しやうが一時に鳴つた。火事である。次郎兵衛はゆつたりゆつたり家を出た。陣州屋の隣りの畳屋

が気の毒にも燃えあがっていた。数千の火の玉小僧が列をなして畳屋の屋根のうえで舞い狂い、火の粉が松の花粉のように噴出してはひろがりひろがっては四方の空に遠く飛散した。ときたま黒煙が海坊主のようにのっそりあらわれ屋根全体をおおいかくした。降りしきる牡丹雪は焰ほのおにいろどられ、いっそう重たげにもったいなげに見えた。火消したちは、陣州屋と議論をはじめていた。陣州屋は自分の家へ水をいれるのはまっぴらであると言ひ張り、はやく隣りの畳屋の棟をたたき落して火をしずめたらよいと命令した。火消したちはそれは火消しの法にそむくと言って反駁はんぱくしたのである。そこへ次郎兵衛があらわれた。陣州屋さん。次郎兵衛はできるだけ低い声で、しかもほとんど微笑ほほえむようにして言いだした。おまえ、間違っつてはいませんか。冗談じゃなしかしら。陣州屋はだしぬけに言葉をはさんだ。これは鹿間屋の若旦那、へっへ、冗談です、まったくの酔興すいきようです、ささ、ぞんぶんに水をおいれ下さい。喧嘩にはならなかつた。次郎兵衛は仕方なく火事を眺めた。喧嘩にはならなかつたけれどこのことで次郎兵衛はまたまた男をあげてしまった。火事のあかりにてらされながら陣州屋をたしなめていたときの次郎兵衛のまっかな両頬ひらには十片あまりの牡丹雪が消えもせずへばりついついてその有様は神様のように恐ろしかったというのは、その後ながいあいだの火消したちの語り草であつた。

その翌あぐる年の二月のよい日に、次郎兵衛は宿場のはずれに新居をかまえた。六畳と四畳半と三畳と三間あるほかに八畳の裏二階がありそこから富士がまっすぐに眺められた。三月の更によい日に習字のお師匠の娘が花嫁としてこの新居にむかえられた。その夜、火消したちは次郎兵衛の新居にぎっしりつまつて祝い酒を呑み、ひとりずつ順々に隠し芸をして夜を更ふかしいよいよ翌朝になつてやつとおしまいのひとりが二枚の皿の手品をやつて皆の泥酔ぬいすいと熟睡じゅくすいの眼をごまかし或ある一隅からのばちばちという喝采かつさいでもつて報いられ、祝賀の宴はおわつた。

次郎兵衛は、これはまたこれで結構なことにはちがいないのだろう、となま悟りしてきよとんとした一日一日を送っていた。父親の逸平もまた、これで一段落、と咳つばいてはぼんきせると煙管※とげつを吐月ぼづにはたいていた。けれども逸平の澄んだ頭脳でもつてしてさえ思い及ばなかつた悲しいことがらがつつた。結婚してかれこれ二月目の晩に、次郎兵衛は花嫁の酌しやくで酒を呑みながら、おれは喧嘩が強いのだよ、喧嘩をするには、こうして右手で眉間を殴りさ、こうして左手で水落ちを殴るのだよ。ほんのじゃれてやつてみせたことであつたが、花嫁はころりところんで死んだ。<sup>②</sup>やはり打ちどころがよかつたのであろう。次郎兵衛は重い罪にとわれ、牢屋へいれられた。

(太宰治「ロマネスク」による)

(注) 炉縁……………囲炉裏のふち。

傲邁……………おごりたかぶつて勝気なこと。

吐月峯……………煙草盆の中にある灰吹き用の竹筒。

問五 空欄 A ・ B に入る語として、最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えよ。

空欄 A に入る語 ア 強硬 イ 鈍重 ウ 粗雑

エ 陰険 オ 不穩

空欄 B に入る語 カ いやしい キ さかしい ク やましい

ケ りりしい コ わびしい

問六 傍線部①について、次郎兵衛は、なぜ「腕の鳴るのを覚え」、また何の「機会を狙っ」ていたのか、わかりやすく説明せよ。

問七 傍線部②について、「やはり打ちどころがわるかった」ではなく、「やはり打ちどころがよかった」と表現されているのはなぜか、本文全体を踏まえて、わかりやすく説明せよ。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

※<sup>くわらく</sup>花洛堀川のほとりに、昔やんごとなき方に宮仕へしし女の、今は人の思ひものとなりて隠れ住むがありけり。同じわたりAに人の髪あげして、なりはひとするいやしき男ありけり。この男、顔かたちいみじくうるはしく、雛人形ひなのごとなりとて、「今業平なりど」などあざなして人の言ひそそのかしける。されば我ならで外に男はあらしなど、おのづから思ひあがりて、ここの女ばらを我がものごとく手に入れてぞたのしみける。

あるとき、この髪あげ男、かの堀川なる女を思ひそめて、道のほどにて会ひても、何くれとほのめかしければ、ただにこと笑ひて、すぐ人をやとひて心のほどを言はせければ、にくからず答へけり。さらばふみ書きて送らましと思ひにたれど、<sup>①</sup>この男はものえ書かざりければ、人に書かせてこそ送りにけれ。次の日つとめて、仲立ちの人、返しのふみ持て来Bにければ、うれしくてやがてうち開き見けれど、我はえ読まず、人して読ませけるに、<sup>③</sup>きよらなる紙に筆の運びの目もあやに書きなしつつ、言の葉もまたにくからず、「ひとしなみCにもあらぬ身を、かうまで思ひ給はること、後の世までも忘れ侍らず。さはあるながら、今しはみづからの心のままにもなりがたきことのみ多く侍らへば、少しく心をのどめ給ひて、我が身の思ふに任するやうDになりつるときこそ待ち給はめや」など、いとありがたきことまでを、なまめかしくぞ書いつけたる。この男、うれしく人々の見るまへ、鼻たかやかにおごめかしつつ聞き居り。しかして、ふみの奥に歌あり。

身は思ふままになるとも髪あげをかみの毛ほども思ふものかは

とぞしるしたる。これにてこときはまりにたれば、この男いといと口惜しがり、足ずりして泣きけれど、女はいきほひある人の思ひものなれば、かひなくて、<sup>④</sup>ただ恥ぢかかやかしてぞやみにけるとなり。

〔『猿著聞集』による〕

(注) 花洛………花の都。京都をさす。

髪あげ………髪を結うこと。また、それを職とする人をいう。

あざな………通称。あだな。

問八 二重傍線部「に」と文法的に同じものを、波線部A～Dの中から一つ選べ。

問九 傍線部①③を現代語訳せよ。

問十 傍線部②と最も近い意味で用いられている「やがて」を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 薬もくはず、やがて起きもあがらで病みふせり。

イ やがて人里に至れば、値を鞍くらつほに結ひ付けて馬を返しぬ。

ウ 法住寺の大臣の五の君、やがて五の御方とてさぶらひ給ふ。

エ 八月二十六日に春宮にたたせ給て、やがて同日に位につかせ給ふ。

問十一 傍線部④について、男が「恥ぢかかやかし」たのはなぜか。本文全体を踏まえて、わかりやすく説明せよ。

四

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、本文を一部改めた箇所がある。

或<sup>ル</sup>日<sup>ヒト</sup>、「著述雖<sup>モ</sup>繁<sup>シト</sup>、適<sup>タ</sup>可<sup>キ</sup>以<sup>テ</sup>騁<sup>ハセ</sup>辞<sup>ヲ</sup>耀<sup>カス</sup>藻<sup>ヲ</sup>、  
無<sup>シ</sup>補<sup>フ</sup>救<sup>スル</sup>於<sup>レ</sup>得<sup>ヲ</sup>失<sup>ヲ</sup>。未<sup>ダ</sup>若<sup>カ</sup>德<sup>ヲ</sup>行<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>言<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>訓<sup>ス</sup>。故<sup>ニ</sup>顔<sup>ガ</sup>閔<sup>ガ</sup>  
為<sup>シ</sup>上<sup>ト</sup>、而<sup>シテ</sup>游<sup>ブ</sup>夏<sup>ニ</sup>乃<sup>チ</sup>次<sup>グ</sup>。四科之格、行本<sup>ニシテ</sup>而学<sup>ナリ</sup>末<sup>ヲ</sup>。

① 然<sup>ラバ</sup>則<sup>チ</sup>綴<sup>ツ</sup>文<sup>ヲ</sup>固<sup>ヨリ</sup>為<sup>リ</sup>余<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>。而<sup>ルニ</sup>吾<sup>ノ</sup>子<sup>不</sup>褒<sup>ム</sup>崇<sup>セ</sup>其<sup>ノ</sup>源<sup>ヲ</sup>、  
而<sup>シテ</sup>独<sup>ダ</sup>貴<sup>ブ</sup>其<sup>ノ</sup>流<sup>ヲ</sup>可<sup>ナ</sup>乎<sup>カト</sup>。」

抱<sup>ク</sup>朴<sup>子</sup>答<sup>ヘテ</sup>曰<sup>ク</sup>、「徳<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>為<sup>レ</sup>有<sup>リ</sup>事<sup>ト</sup>、優<sup>劣</sup>易<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>。文<sup>章</sup>ハ

微<sup>ニシテ</sup>妙<sup>シ</sup>、其<sup>ノ</sup>体<sup>難</sup>識<sup>シ</sup>。夫<sup>レ</sup>易<sup>キ</sup>見<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>粗<sup>也</sup>、難<sup>キ</sup>識<sup>リ</sup>者<sup>ハ</sup>

精<sup>也</sup>。夫<sup>レ</sup>唯<sup>ダ</sup>粗<sup>ナル</sup>也、故<sup>ニ</sup>銓<sup>ハ</sup>衡<sup>有</sup>定<sup>メ</sup>焉。夫<sup>レ</sup>唯<sup>ダ</sup>精<sup>ナル</sup>也、

故<sup>ニ</sup>品<sup>藻</sup>難<sup>シ</sup>一<sup>トシ</sup>焉。吾<sup>ノ</sup>故<sup>捨</sup>易<sup>キ</sup>見<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>粗<sup>ラ</sup>、而<sup>シテ</sup>論<sup>ズ</sup>難<sup>キ</sup>識<sup>リ</sup>

之<sup>ヲ</sup>精<sup>ラ</sup>。不<sup>タ</sup>亦<sup>ナラ</sup>可<sup>ト</sup>乎<sup>ト</sup>。」

〔抱朴子〕による

(注) 騁……思い切り十分に述べる。

藻……詩や文章に用いられる華麗な表現。

得失……社会の利害。

顔閔・游夏……「顔」は顔回、「閔」は閔子騫、「游」は子游、「夏」は子夏。みな孔子の弟子  
の名。『論語』先進篇に「徳行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語には  
宰我、子貢。政事には冉有、季路。文学には子游、子夏」とある。

四科……孔子が弟子の才能を四つに分類したもの。前注を参照。

抱朴子……この文の筆者、東晋の葛洪のこと。

有事……ここでは、具体的な実体があること。

粗・精……「粗」は大雑把で丁寧でなく価値が低いこと、「精」は細かいところまで注意  
が行き届いていて価値が高いこと。

銓衡……………才能などをはかりしらべること。

品藻……………人物や作品を批評して等級づけること。

問十二 傍線部①②の読み仮名を記せ。

問十三 「或るひと」の話に見られる次のア～キの言葉について、「著述」「德行」に対応するものをそれぞれ二つずつ選び、記号で答えよ。

ア 得失	イ 顔閔	ウ 游夏	エ 四科	オ 格
カ 源	キ 流			

問十四 傍線部①について、歴史的仮名遣いの平仮名で書き下し文にせよ。

問十五 傍線部②について、筆者はなぜこのように述べているのか。「易見之粗」「難識之精」が本文中で指す内容を明らかにしながら、本文全体を踏まえて、わかりやすく説明せよ。